

2005 年梅子杯総括コメント

2005 年 11 月 12 日

ナカオシュンスケ

1 . はじめに

今年も梅子杯の季節がやってきました。梅子杯には創設当初から予選審査員としてご指名をいただいているので、いつも以上に審査に気合が入ります。去年の総括コメントでも書きましたが、梅子杯は年の瀬に催される最後の Open 大会で、是非とも皆さんに今年を締めくくる最高の Speech を発表してもらいたいと思っています。ですので、審査結果のコメントを書く際に、なるべく丁寧に、かつリライトする際のお役に立てるように、私の気づいた点を率直にジャッジングシートに記させてもらいました。

悲しいかな予選審査員というものは、直接皆さんにお会いして面と面をつきあわせてお話をさせていただくことはできません。そのため、改善したほうが良いのではないかというポイントを記せば記すほど、応募者の方が、自分の意見のみならず人格まで否定しているのではないかという誤解を抱いてしまうことが往々にしてあります。しかし、私はその Speech の作者が誰であるかも知らないし、どんな人かも知らないし、会って話したこともないのです。決して個人攻撃をするつもりでコメントを書いたことはありませんので、どうか納得がいく点があれば、真っ白な気持ちでそれを見つめてもらって、リライトに生かしてくださればと思います。

私の審査の一つの特徴なのですが、「これはどう料理したら美味くなるかわからない」という絶望的な Speech に対しては多くのコメントを書くことができません。改善する余地があり、潜在的なレベルの高い Speech にこそたくさんのコメントを書くことができるのです。ですから、たくさんコメントがあった人は落ち込むのではなく、是非とも私の稚拙なコメントをリライトする際の一助としてくれたら幸いです。

2．総括コメント

ドリームチームを結成すればよいのか？

今回予選審査を担当していて非常に目に付いたのが、とにかく何でもいいから専門家を寄せ集めさえすれば、全ての問題が解決するだろうという Speech が非常に多かったということです。例えば、「この問題を解決するために、政府・弁護士・医師・NPO・民間人がチームを組まなくてはなりません。そして被害者に対して常に的確なアドバイスを与えることが必要です。そういう地道な活動を積み重ねていけば、問題は必ず解決します」といったような記述がそうです。まさに発想が「集めるだけ集めたい」という読売巨人軍状態になっていて、そろそろ食傷気味になってきました。

大切なのは、なぜそういうチーム編成にする必要があるのかということです。チーム編成案を掲げるからには、そのチーム内の一人一人がどのような役割を持っていて、それらを組み合わせることで、どのように問題解決を図ることができるのかというプロセスを示すことが必要です。

仮に、薬物中毒患者をよみがえらせるというプロジェクトで、患者の家族・ボランティア・中毒から立ち直ったことのある経験者・医師がチームを組むべきだという Speech をしたとしましょう。そこで、「チームを組んだからはい終わり」とやっちゃってはいけません。考えなくてはならないポイントは、患者が復活するというゴールに到達するまでにどのようなフェーズがあるのかを検証する、各々のフェーズでチームのそれぞれのメンバーがどのような役割を果たすのかを考える、上位のフェーズで脱落してしまった人をもう一度バックアップするには誰が何をすべきなのかを考える、などということが必要なのです。とにかくドリームチームを形成しさえすれば良いといういい加減な Speech は、真剣にテーマに向き合っているとは言えず、必然的に評価も低くなってしまうことを覚えておいてください。

第三者機関という名のマジック

政府や民間に任せていてはうまく行かない問題に対して、「第三者機関（NPO とか NGO とかいう例も同じ）を設置して問題解決にあたりましょう」ということだけを単純に述べている Speech も多くありました。このような Speech では、とにかく第三者機関を設置させればそれがうまく機能するだろうという前提だけで話が展開されているのです。

これは言ってみれば大昔から批判を浴びている、「政府に任せれば何でも OK」という「政府スーパーマン型 Speech」の亜種であるに過ぎません。「『政府に任せておけ』、だけではジャッジから批判を浴びるな。だったら第三者機関に任せておけとやれば評価が上がるだろう」という魂胆が見え隠れしてしまう気がしてならないのです。

第三者機関を設置するならば、それがなぜ有効に機能するのかという点をしっかりと説明しなくてはなりません。考えなくてはならないポイントは、第三者機関はどのような人たちで構成されるのか、既存の機関と比較して、どのような権限を持って、どのような調査を行い、どのような職務執行をすることができるのか、なぜ既存の機関には正しくできなかったことが、第三者機関であれば正当な運用を行うことができるのか（第三者機関はどのようなインセンティブを持って行動するのか）、といったところでしょうか。これらがすっぱり抜け落ちて、ただ単に「第三者機関を設置しなくてはならない」という提言だけ行うのは、いかにも説明不足という感が拭い去れません。

ちゃんと後段で説明していますか？

日本の ESS の Speech は Introduction の後に必ず Thesis Statement が入っています。全ての Speech に Thesis Statement が入っていることの是非は一度考えてみると良いと思うのですが、一部の本選 Judge が Thesis Statement 無しの Speech を嫌う傾向があるらしいので、皆さんとしては泣く泣く入れている人も多いのではないかと思います。

最近の傾向として面白いのは、皆そこそこ凝った Thesis を入れているということです。数年前は、“Today I would like to talk about ~.”と言って、その Speech のテーマを 10 語くらいでまとめるものが一般的でしたが、最近はテーマのみならず、その Speech を行う目的や目標まで述べるケースが多く見受けられます。

別にこれは悪いことではありません。むしろ問題なのは、Thesis として表明したことは、単にそこで表明するだけでなく、必ず後段の Speech の中で説明しなくてはならないということです。これができていない有言不実行型の Speech がかなりあるのです。

よくある悪い例が、Thesis の中で極めて抽象的な物事を説明するとか認識を持ってもらうという宣言をしておきながら、後段ではその宣言が全く忘れられてしまっているというパターンです。例えば、「第二次世界大戦の歴史認識をみなさんと共有したいと思います」と述べておきながら、作者の「歴史認識」らしきものは後段には全く述べられていないとか、「生きることの大切さを皆さんにわかってもらいたい」と言っているにもかかわらず、作

者の Speech から生きる希望をわかせるような内容が感じられないとか、例を挙げれば枚挙に暇がありません。

説明できもしないことを、「説明します」と宣言するのは、Speaker として信義則違反だと思います。私のような意地の悪いジャッジは、必ずその Speech の Thesis に立ち返って、本当にその人が前段で高らかに宣言していたことを達成しているのかをいつもチェックしてしまいます。そして、ほとんどの人が Thesis で述べていることを忘れてしまっている現状を見て、なくなつて減点の赤ペンを入れざるを得ないことになるのです。どうか気をつけてください。

まずは自分でやってみましょう

自分のホームページでも何度も触れてきたのですが、人に何かをやらせようと Speech の中で提言するからには、まずは自分でやってみることが最低限の礼儀です。自分で試してみても、「これは素晴らしいことだ」と思えて初めて、人にも勧めることができるのではないのでしょうか。

今回の梅子杯でも、「まずは自分でやってみようよ」という Speech が非常に多くありました。例えば、「ボランティアを引き受ける人の数が増えることで、障害者の人たちが救われるのです」とか「税務申告書を自分で書くことで税の中身が理解でき、税金の無駄遣いに対する意識が強まる」(例は実際の Speech の内容と敢えて少し変えてあります)と言った類の提言がそうです。しかし、残念ながらこうした Speechの中には、自分でそうした経験をしたことがあるとは到底思えないくらい薄い内容しか込められていないのです。自分で検証しようと思えばできる事柄について、そうした努力を怠って、ただ言葉だけの提言をしているようでは Originality 溢れる Speech などできるはずがありません。

そもそも「税務申告書を自分で書く 税の中身が理解できる 税の無駄遣いに対する意識が高まる」というそれぞれのステップは、一見もっともらしい展開ですが、一歩下がってよく考えてみると、「本当にそうなのか？」と疑問符が付くような内容です。特に「税の中身を理解したために、税の無駄遣いに対する意識が高まる」というのはかなり怪しげな理論です。

こういうことを放置したまま Speech を送ってくる人は、何かの本に書いてあったことを自分なりに検証せず、そのままばくってきってしまうような人なのです。本当に自分で税務申告書を作り、税の内容をある程度理解した人ならば、どのような内容を理解したことで、

どういう類の税の無駄遣いに対する意識が高まったのかということ具体的に語ることができるはず。そういう具体的な話が Speech の Originality となって聴衆をひきつけるのです。そのような努力なしに自分の Speech を評価してくれと頼まれても、それは飲めないお願いです。

3 . おわりに

まずは行動を起こしましょう

えらそうなコメントを書いているにもかかわらず、私はとても怠け者です。仕事にしても勉強にしても、うまいことサボるコツを心得ています。ですから、逆に皆さんの Speech を聞くと、皆さんがどこで考えることをサボっているかを見つけ出すことに私は長けているのです。抽象的な適当な言葉で逃れようとしている応募者の魂胆は一目瞭然です。私のコメントは主にそういう部分に集中します。

これは応募者に対して嫌がらせをしているわけではありません。たいていの場合、抽象的な言葉で逃げている部分を深く追求し、実際に自分で行動してみることで初めて Original な考え方というものが生まれてくるのです。皆本当は Speech を面白くする要素をたくさん持っているのに、それを具現化する前に Speech 作りを終えてしまっているのです。それは本当にもったいないと思います。

よく、「経験したことだけを語るのが Speech ではない」ということだけを強調する人がいます。もちろんそれはある意味では正しいのですが、大部分の点で僕はおかしいと思っています。確かに、「これでいこう」という Topic を決めるときに、これまで自分が経験したものの中からのみ Topic を探し出す必要は必ずしもないと思います。しかし、Topic を決めたその日から、その Topic にまつわる様々なことを経験することができるのです。

それは、「ボランティア活動」などといった実際に体験することが比較的容易なものだけでなく、「憲法改正」などというある意味で抽象的で大きな枠組みの中で語られる Topic に対しても同じだと思います。幸いなことに、皆さんが今いる大学には様々なことを研究している専門家がたくさんいます。当然、憲法を研究している人もいるでしょう。そのような場合は、そういう人達と積極的にディスカッションすることで、図書館の中で自分ひとりでうんうん唸って Speech を書いていただけでは決して生まれてこない新たな視点があなたの頭の中に芽生えるのです。あなたが相談した憲法専攻の教授は、政府の審議会で実際に憲法改正の草案をまとめてくれる人をあなたに引き合わせてくれるかもしれません。そ

ういう人脈から得た知識・知恵は、あなたの Speech を彩り豊かなものにしてくれるに違いないでしょう。

他人に行動を起こしてもらいたいと訴えている Speech をしているにもかかわらず、自分は実際に行動を起こしたことがない。行動を起こして経験して学んだことが何も無いので、Speech の中身は薄いまま。中身が薄い Speech を聞いたところで、聴衆があなたの Speech に感銘を受けて行動を起こしてくれるわけがありません。人に頼む前にまずは自分が動く。どの社会生活においても当てはまる大原則が、Speech を作る世界からはすっぱり抜け落ちてしまっているのはとても奇妙だと思います。

みんなで力を合わせていますか？

みなさんの ESS で下級生を Speech Section に誘う時に、多くの先輩たちは「Speech は一人で作るものではない。仲間と協力し合いながら作るものだ」という謳い文句を必ず口にするのではないのでしょうか。それはもちろん正しいことなのですが、みなさんは本当に仲間と協力し合いながら Speech を作っているのでしょうか。

確かに、形式的には Brain Storming や Flow Bashing を行っているかもしれませんが。頼まれれば仲間の間で Speech にコメントを行うことも多いと思います。しかし、それが本当に実質的に成果をあげていると胸を張って言えるのでしょうか。毎年のことなのですが、あいまいな定義、抽象的で何を言っているかわからない言い回しで塗り込められた Speech が数多く予選審査員の元に送られてきます。本来ならば、Brain Storming や Flow Bashing やコメントの中で、「それってどういうこと？」という疑問文が出てくれば、あいまいな言葉が放置されたままになることはありません。しかし、現実問題として、作者が真面目に考えなくてはならない論点の数多くが、そのまま放置されて提出されるのを見ると非常に残念だと思います。

私は自分のホームページで、「現役生同士がペアを組み、それぞれがお互いの Speech に対して何でもよいから 100 個の質問を挙げる」事を行うと良いと話してきました。レクチャーなどに呼ばれた際は（気軽に呼んでください）実際に 100 個の質問とはこのように作るのだという具体例を挙げ、聴講生の皆さんからは非常に好評を頂いています。ただ、私が帰った後に本当にそれを実践している ESS があるかと言えば、恐らく一つもないのではないかと疑っています。

100 個の質問を作るとなると、質問するほうは相手の Speech の内容をわかった気になるこ

とはできません。少しでも不明確なところがあれば、「それはどういうことなの？」と問いかけることが必要です。これが既存の学内の勉強会でのコメントセッションと違うところです。そういう、自分に嘘をつかず、決してわかった気にならないで質問を出し合うことをペアを変えて5ラウンドも続ければ、仲間の Speech にはどういう点が不足していて、どういう点がわかりにくいのかということが見えてきます。それと同時に、どういう点を追求していけばその Speech が面白くなる可能性があるのかというポイントがわかるようになります。そういう経験を積んで獲得した眼力は、自分の Speech に生かすことはもちろん、今後後輩を指導する際にも威力を発揮するようになるのです。

こうした地道な活動を続けていけば、皆さんの ESS は連戦連勝を重ねる好循環に突入することができるでしょう。全員が切磋琢磨して各部員の Speech の改良を助け、その結果として全員が教育能力を高めることができるため、次の年も、そのまた次の年に入ってくる下級生に対して、質の高い教育をむら無く提供することができるからです。ほとんどの ESS は、ある年に彗星のようにスターが現れ、そのスターに憧れて能力の高い下級生が入ってくるので、2年くらいは好循環のサイクルに入るものの、それ以降は息切れしてしまうパターンが往々にしてあります。好循環のサイクルを維持するには、全員が全メンバーの Speech に対して率直な疑問点・アドバイスを呈してあげて、その Speech を改良することに留まらず、そうすることでそれに関わった全ての人の教育能力を高めることが必要なのです。それには、「100個の質問を作る」のを実践するのが一番の近道ではないかと私は思います。

自分が大きな大会で勝ちたいと思ったら、自分のことだけ考えるのではなくて、自分の同級生への協力、下級生に対する教育活動に積極的に時間を割いてください。前の話とも共通しますが、「教えることは学ぶこと」であり、他人の Speech のアドバイスを重ねることで、自分の Speech をどのように変えることができるのかということが見えてきます。

本選審査員に接触する前に学生たちの間でできることがあるはずです

最近特に私が警告を発していることは、決して私的に本選審査員から事前にリライトをしてもらったりするべきではないということです。本選審査員に事前に接触することは、裁判になぞらえて言えば、事前にどのような答弁を行えばよい結果を引き出すことができるのかということを、公平中立であるべき裁判官に対して問答集を書いてもらうようなものです。そういう行為は、「全部ゴーストライトしているわけではない」という言葉で逃げられるものではありません。そういうけしからん行為を我が物顔で行う本選審査員がいるという状況にはやりきれない思いが立ち込めますが、自己欲のためなら何でもありというモラルのない現役生にも非があると思います。

本選審査員などに接触する前に、まずは自分たち ESS でやるべきことがあるでしょう。他人におぶってもらって山に登っても、自分のためには何にもならないということを認識すべきです。学生諸君がそういうけしからん行為を黙認するからこそ、ノスタルジックな思い出に浸りたい本選審査員が、不必要な部分にまで学生の ESS 活動に介入してくるという笑えない状況が生まれるのです。それは長期的に見れば、現役 ESS にとって弊害以外の何物でもないのではないかと思います。

本当に最後の最後

Speech をやっていた人は物事の本質を理解するのがとても早いです。それはひとえに、真面目に Speech に取り組んでいた人は、身近なことを題材にして、その中から世間一般に通じるような原則を抽出ことができる、世間一般に通じる大原則を身近な題材に活用することができる、という上下二つの循環を常に頭の中でめぐらすことができるからだと思います。

私が、ESS の全メンバー間で 100 個の質問を作り出す活動が効果的だといっているのは、実はこの活動を通して、上記の二つの流れを見つけ出すことができるからに他なりません。例えば 5 人の仲間達の Speech に対して、それぞれ 100 個の疑問を呈していけば、各々の Speech がテーマにしている題材に共通する原則（＝ものの見方）というものがわかってきます。それがわかったら、今度はその原則を他の Speech をもっと面白くするためにあてはめて考えることができないかというふうに、視点を変えて Brain Storming や Flow Bashing に参加することができるようになるのです。そうすれば、何も準備しないでのんびりとテーブルに座って意見を交換した気になる場合に比べて、非常に前向きな議論ができるようになることに気がつくと思います。

私が自分のサイトである "Drunk on Speech" (<http://drunkonspeech.hp.infoseek.co.jp/>) を通じて皆さんに発信しているエッセーは、こうしたサイクルを繰り返すことによって出てきたエッセンスを紹介したもののなのです。大変ありがたいことに、内容に関しては ESS 内外の色々な方々から大変御好評を頂いています。もしもみなさんが、自分の ESS の中で、100 個の質問を出し合うという活動を継続してくれたら、みなさんの ESS の中でも「コンテストで勝つための 50 の法則」などの門外不出のバイブルを作ることができるようになるでしょう。そうすれば、10 年前から毎年ほぼ同じ内容を繰り返している学生団体のマニュアルとは違った切り口で Speech を捉えることができるようになります。そうなれば、あなたの ESS の好循環は息の長く力強いものになるでしょう。

どうしたら自分達の ESS を強くすることができるかを考えてみてください。それは地道な努力によって成し遂げられるものです。地道な努力を継続することでメンバーの足腰が鍛えられ、全員がスタープレイヤーになる下地ができあがるのです。

社会人として今まで以上に多くの人々と出会う機会が増えました。驚くことに、「この人は元気がいい人だな」と思う人が実は ESS で Speech をやっていたことが数多くあります。Speech は内面の思考能力を鍛えてくれるだけでなく、外面も生き生きとさせてくれるのです。あなたは内面も外面も充実した Speech を発表することができますか。梅子杯の本番までまだまだ時間はあります。自分ひとりでできることも、ESS の仲間に手伝ってもらえることも、まだまだたくさんあるはずです。どうかあきらめずに頑張ってください。そして最後に、みなさんが壇上で輝くことを期待しています。

長々とありがとうございました。

Speakers are not braver than anyone else.

They are just braver seven minutes longer on the stage.

ナカオシュンスケ